

論文要旨

氏名	宮嶋 隆一郎
<p>論文の要旨</p> <p>本研究では、咀嚼筋痛を有する顎関節症患者に対するスタビライゼーションスプリント療法の効果として、疼痛、下顎運動および咬合状態がどのように変化するかについて検討した。</p> <p>被験者は、本学附属病院顎関節症科を受診した患者のうち、顎関節症 I 型と診断され、実験の主旨を理解し承諾を得た 8 名とした。各被験者に対して上顎型スタビライゼーションスプリント(stabilization splint:SS)を製作し、SS 装着前後における前方および側方限界運動距離、咬合状態、疼痛の visual analogue scale (VAS)、咬筋・側頭筋における圧痛閾値(PPT)を検討項目とした。データ採取は、SS 装着直前およびSS 装着 2 週間後に行い、計測結果については paired t-test および Wilcoxon の符号順位検定を用いて比較検討した。</p> <p>SS 装着前後において、前方運動および疼痛側における側方限界運動距離は統計学的に有意に増加した。咬合力、咬合接触点数、咬合接触面積は、いずれも装着後に減少傾向を示したが、有意差は認められなかった。VAS 値は、4 項目のうち、3 項目に装着後、有意な減少が認められ、PPT は、装着後に有意な上昇が認められた。</p> <p>今回の結果より、咀嚼筋障害を有する患者に対し SS 療法を行うことにより、筋痛が緩和され、下顎運動距離が長くなることがわかった。この変化に伴い、咬合状態も変化することが示唆された。</p>	